

黙示録19章1-10節 「まことの婚姻相手」

1A 大淫婦の滅び 1-5

1B 天における大歓声 1-3

2B 御座からの声 4-5

2A 小羊の婚宴 6-10

1B 清い衣の花嫁 6-8

2B 預言の言葉 9-10

本文

黙示録 19 章に、入ります。私たちは、ここ三回に渡って、バビロンに対する神の裁きの幻を見てきました、17-18 章です。バビロンについては、黙示録 14 章において、御使いの宣言によって、その倒壊が教えられていました。そして七つの鉢の災いにおいて、最後の第七の鉢がバビロンに対して向けられ、その大きな町が三つに分かれました。そして 17 章において、大淫婦が獣と他の王たちによって滅ぼされ、けれども 18 章において、一日のうちに倒壊することが預言されています。17 章においては、バビロンの宗教的な側面が反キリスト率いる王たちの連合によって滅ぼされます。これは七年間の患難時代の半ばではないかと考えられます。そして 18 章は、バビロンの商業的な側面、その莫大な富のシステムが一気に崩壊する姿です。これは大患難時代の終わりの時に起こるのではないかと思われま

同じようにして、平行して獣の国に対する神の裁きも読みました。14 章において、バビロンの倒壊を宣言した後に、獣の国の住民が永遠の火の中で苦しむことが書かれています。そして、16 章の七つの鉢の災いは、第一から第五までが獣の国に向けられたものでした。第五では、獣の座に鉢がぶちまけられたので、国全体が暗くなります。それでちょうど、出エジプトの時にパロたちがイスラエルを追跡したのと同じように、最後のあがきを獣がするのです。第五の鉢の災いにおいて、獣と悪魔、そして偽預言者が三つ巴になって、悪霊によって、東からの王たちをも引き寄せて、イスラエルのイズレエル平野にあるメギドの丘、すなわちハルマゲドンに集結させるのです。商業的バビロンが倒壊し、獣の国も暗くなり、最後の最後は、反キリスト率いる世界の軍隊がハルマゲドンに集まって、それから神とキリストに対して戦争をしかけるのです。その彼らに対する、神とキリストの戦いは、キリストの地上への再臨によって終結します。それが 19 章の後半に書かれています。黙示録全体のクライマックスです。

私たちは今晚、19 章前半を読みます。バビロンが滅んで、そしてキリストが天から地上に戻って来られて、反キリストに対して戦われるその間で、天において大きな賛美が起こり、婚姻が執り行われるという内容です。バビロンが大淫婦であり、地上の王たちは不品行を行なっていましたが、

天においてはキリストが花婿であり、教会が花嫁であり、婚姻式に入ります。この対比がとてつもなく鮮やかです。

1A 大淫婦の滅び 1-5

1B 天における大歓声 1-3

1 この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。2 神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

天において、大群衆が大声を上げました。これらの大群衆は、患難時代において殉教した人々であります。黙示録の幻では、患難の中において首を斬られた者たちが、正しい裁きを主が下して下さるように願っている箇所が数多くでてきました。「6:10 聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさないのですか。」そして主は彼らの白い衣を与えて、「6:11 あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言い渡された。」そして、彼らは天に入っていること、神の救いを賛美していることが7章に書いてあります。そして、17章において、私たちは大淫婦が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている姿を見ました。そして18章です、商業主義のバビロンが倒壊したことを、天で喜びなさいという掛け声を御使いがかけました。なぜなら、「18:24 預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見出されたからです。」とあります。

彼らの叫びは、神の真実、聖なる姿を見たいということでした。非常な義に対する飢え渴きでありました。そして、確かに自分は正しい神を信じていたのだという報いが欲しかったのです。イエス様が、「マタイ 5:6 義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」と言われたとおりです。私たちがこの世で正しく、神を敬いながら生きようとすれば、同じように圧迫を受けます。それに対する報いを、神は終わりの日に行なってくださいます。「2テサロニケ 1:8-10 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の・・そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです・・感嘆的となられます。」

ヨハネがこの預言を行なっている時、ローマはまさに大淫婦そのものでありました。ギリシヤやローマの異教の神々、それらは不品行や忌まわしいことが付き物でありますし、国民宗教として皇帝礼拝がありました。その最たるものが、コロセウムです。今も世界遺産となっている、ローマの競技場には、無数の獣がそこで戦わせて死んでいくのをエンターテイメントにしていました。そして闘技家がどちらかが死ぬまで戦わせました。もう信じられないのは、そこに大量の水を貯めて、船

を浮かばせて、そこで海戦ごっこをさせて、どちらか倒れるまで戦うのです。そうした、残虐で残酷で、狂気に満ちた退廃文化の中に、敬虔なキリスト者たちが投げ込まれました。放たれたライオンに、生きたまま喰い殺され、十字架に付けられ火あぶりにされました。これを楽しんで観客は見ていたのです。



ここで、「ハレルヤ」と大観衆は叫んでいます。ヘブル語であり、新約聖書ではこの箇所だけに出て来て、四回も出てきます。神をほめたたえよ、という命令です。神をほめたたえるのですが、それは、「救い、栄光、力は、われらの神のもの」ということです。神の救いが現れました。世の汚れから、彼らを免れさせました。そして神の栄光が現れています、バビロンが滅びました。そして神の力も現れています。一人一人は、弱く小さき者たちであります、主はバビロンを滅ぼす力をお持ちであります。主は、弱い者のために、最も強い者をも押し潰す力を現されます。

それから、彼らは「神のさばきは真実で、正しいからである。」と言われていました。私たちは、この世の不条理に生きています、神がなぜこのようなことをお許しになるのか、疑問に思うことがあります。悪が存在が、キリスト教に対する挑戦状のようなものです。なぜ、神が悪を許されるのか？しかし、天において、私たちが神のさばきを見る時に、「アーメン、神のさばきは真実で、正しいのである」ということができるでしょう。イエス様は、神が正しく裁かれることを知って、十字架の上で息を引き取られました。

そして、ここで主が裁かれたのは、大淫婦が不品行を犯していたというところにあります。聖徒たちは、偶像礼拝や、この世の欲を満たすようなものに関わりませんでした。それらを拒みました。それゆえ迫害を受け、殺されました。言い換えるならば、彼らは主イエス・キリストに対する霊的な

貞潔を守ったということです。世との妥協をせず、最後まで信仰を守ったということです。そのために、大きな報いを彼らは受けます。

3 彼らは再び言った。「ハレルヤ。彼女の煙は永遠に立ち上る。」

彼らが、神をほめたたえているのは、永遠の煙が立っているからです。ちょうど、エジプトから脱出したイスラエル人が、紅海の上に浮かんでいるエジプト軍の兵士や戦車を見た時に、「もはや、我々を追いかけて、捕まえ、我々を再び奴隷とするものたちは、やって来ない。」という、絶対的な革新と確認を得ました。今、ここで賛美しているのは、バビロンが自分たちを苦しめることはもはやなく、永遠に煙が立ち上っているのだと言っていることです。神は、ご自分の民のために永遠の滅びをもたらされます。キリスト者には、次の救いの保障が与えられています。「ヘブル 2:14-15 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」

2B 御座からの声 4-5

4 すると、二十四人の長老と四つの生き物はひれ伏し、御座についておられる神を拝んで、「アーメン。ハレルヤ。」と言った。

私たちは、黙示録を読んでいると忘れがちなのですが、実は天における姿は何ら変わっていないことです。4章と5章において、主の御座の前や周りには二十四人の長老と、四つの生き物は変わりなく、何度となく出てきました。主の前に礼拝し、そして他の人々を礼拝に導いています。四つの生き物は、エゼキエル書1章に出て来るケルビムではないかと思われ、24人の長老は教会の代表者ではないかと思われ、今、ここで大歓声が聞こえて来て、彼らはひれ伏し、神を拝み、「アーメン」と言っています。これは、その通り、同意するという意味です。私たちに何が起ころうと、天では主への礼拝が絶やすことなく行われていることを示しています。主が御座におられることを知るのには安心します。また私たちはいつでも、どんなことが起こっても、礼拝によって心を落ち着かせ、思いを定めることができます。

5 また、御座から声が出て言った。「すべての、神のしもべたち。小さい者も大きい者も、神を恐れかしこむ者たちよ。われらの神を賛美せよ。」

1-3節にある、天における大歓声の後で、御座の前には長老たちと生き物がひれ伏し、それから御座からの声がします。全ての神の僕に対して、それが天使であろうが、救われた魂であろうか、神を恐れかしこむのであれば、全てが神を賛美せよと呼びかけています。

2A 小羊の婚宴 6-10

そして、次にすばらしい出来事が天で起こります。ずっと、教会の姿は 5 章以降ありませんでしたが、再び教会です。そして、天にいる者たちがみな、小羊なるイエス様と教会との婚宴を見て、喜び、祝福しています。

1B 清い衣の花嫁 6-8

6 また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。

先の天の大群衆が、声を上げています。その声は、さらに大水の音、激しい雷鳴も伴って声を上げています。天使も加わっているのでしょう。再び「ハレルヤ」と声を上げています。そして、ここで「万物の支配者」と呼んでいます。英語では、Lord God Omnipotent となっています。主なる神、全能者と書いてあります。この方が、「王となられた」とありますが、ギリシヤ語では、「王となり、当地を始められた」とあります。イエス様が御座から立ち上がり、地上に戻られ、王座に着かれるのです。その前に主が行なわれることがあります。

7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。

彼らが喜び楽しんでいるのは、神をほめたたえているのは、小羊の婚姻の時が来たからです。花嫁がここにいます。そうです、黙示録 2-3 章で七つの教会を私たちは見て、天における教会の姿を 5 章で見ました。ずっと患難時代を見てきましたが、そこで殉教した聖徒たちはいますが、彼らは今、喜び楽しむ側にいます。教会が初めに世から贖い出され、その目的を今、果たすのです。それは、教会はキリストの花嫁だということです。

私たちキリスト教会の特徴とは何か？それは、水のバプテスマによく表れています。ローマ 6 章にあります。罪に対して私たちは死んだ者となりました。キリストが十字架につけられ、死んで葬られましたが、罪に支配される古い人は十字架に付けられ、死んで葬られました。そしてキリストが甦りましたが、私たちも新しい命にあって生かされます。キリストに結ばれた者となったのです。そして、キリストが天に昇られ、御座に着いておられますが、教会にもそれぞれ座が与えられています。キリストが地上に戻られる時は、栄光の姿をもって教会も戻ってきます。私たちが、キリストに結ばれた者となった、この方の死と甦りにあずかっており、今も、キリストを信じる信仰によって生きている者たちの集まりです。

パウロは、世の汚れから離れて、教会がキリストのものだけになるようにと、努力していました。何かと肉の行ないの多いコリントの教会に対して、「2コリント 11:2 私はあなたがたを、清純な処女

として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。」と語っています。そして、エペソ 5 章には、美しい、キリストと教会の関係が書かれています。妻が夫に従いなさいと勧めました、なぜなら教会がキリストを主として従っているからです。夫は妻を愛しなさいと言いました、なぜなら、キリストが教会を愛してご自身を捧げられたからです。「エペソ 5:26-27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」そして、パウロは、人がその父母を離れて、妻と結ばれ、一心同体になることを話して、それが、キリストと教会とをさして言っていると言っています。

教会は、キリストに結ばれているのですが、まだ結ばれていません。それで「花嫁」と呼ばれている所以です。今の箇所では、キリストが御言葉によって、水の洗いによって、教会をきよめて聖なるものとするためだとあります。そして栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためだとあります。これはまさに、婚宴において新郎の前にやって来る新婦の姿のそれでもあります。エステル記において、王妃の候補である者たちが、12 カ月もかけて、王の間に出るために化粧や身だしなみをしていましたが、そういった準備期間が今なのです。主にお会いするのは、主が戻って来られた時、教会の携挙です。ですから黙示録の終わりは、「御霊も花嫁も言う。「来てください。」」とあります。そしてイエス様も、「しかり。わたしはすぐに来る。」とあります。

当時のユダヤ人の婚姻は、段階がありました。初めは、結婚を両側の親が取り決めることです。花嫁料も払います。これは長い期間があります、まだ小さい男女だったりします。けれども、次にいわゆる婚約の段階に入ります。ここでは法的に結婚と同じようにみなされ、相手への貞潔が試されます。大体、一年ぐらいです。この時に、マリヤが妊娠したので、律法によれば石打の刑なのですが、ヨセフは内々に離縁しようと思ったのです。そして、花婿が花嫁を引き取りにきます。行列を作って、花嫁の家に向かいます。マタイ 25 章にある、十人の乙女の喩えはその時の様子です。そして、花嫁が花婿の家に行き、婚宴に入ります。七日間を行ないます。ヨハネ 2 章の、水をぶどう酒に変えた奇跡は、そのような婚宴で行われました。

私たちは、その婚約をして、花婿が来るのを待っている段階です。イエス様が、弟子たちから離れる時に、言われました。「ヨハネ 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとのに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」私たちは、この方を待ち焦がれています。パウロはその愛の思いを、「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。(1コリント 16:22)」と言いました。そして、主が天から降りてこられる時に、ちょうど花婿が花嫁を引き取りに来るように、戻ってきてくださいます。そして私たちは主の住まわれる所、天にやってくるのです。そして、そこで婚姻式があります。

8 花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行

ないである。」

花嫁の衣装に注目しています。光り輝いているというのは、神の栄光を反映しています。清いというのは、聖徒たちが清められている、白くされていることを意味しています。先にエペソ書 5 章に出てきたように、御言葉によって、聖霊の洗いによって、栄光の姿に変えられるべく、教会は今、整えられているのです。17 章にあった、大淫婦の紫と緋の衣とは対照的です。キリスト者は、栄光の姿に変えられます。「ピリピ 3:20-21 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」

そして、「その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである」と強調しています。私たちが、主を信じる信仰によって義と認められました。その者たちが信仰をもって生きる時に、正しい行いをしていきます。それは自分たちではなく、主が用意された良い行ないですが、それらを行なってきます。その行ないが、主の前では大いなる報い、きよい麻布のようにみなされるのです。パウロは、このキリスト者の営みを、「エペソ 4:24 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」とっていました。偽りを捨てて、真実を語ることを身につけます。怒っても罪を犯さないようにします。盗んでいるものはそれをやめ、かえってしっかりと働き、施しをします。そして、悪いことば、苦々しい思い、悪意、そしり、こういったものは聖霊を悲しませるので、脱ぎ捨てて、親切、心優しい者になる、互いに赦し合うということでしょう。

2B 預言の言葉 9-10

9 御使いは私に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」と言い、また、「これは神の真実のことばです。」と言った。

御使いは、「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ」と言っていますが、婚姻ではなく、婚宴とあります。そうです、披露宴です。結婚式があり、それから披露宴があります。先ほど話したように、当時のユダヤ人は婚宴を七日間行ないますから、盛大なものです。ある人は、この婚宴は主が地上に戻られて、神の国を立てられる時に行なうと言います。「マタイ 8:11 あなたがたに言いますが、たくさんの方が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。」そしてイエス様は、最後の晩餐において、次にぶどう酒を飲むのは神の国が来る時だと言われています。「ルカ 22:16-18 あなたがたに言いますが、過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません。」そしてイエスは、杯を取り、感謝をささげて後、言われた。「これを取って、互いに分けて飲みなさい。あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」

食事に招かれる人々について、また祝宴に招かれることについて、主との交わり、その楽しみに招かれることとして、聖書ではいろいろなところで書いています。「1コリント 1:9 神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」「黙示 3:20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」これが霊的に、私たちは今、味わい、将来の御国においては盛大に祝われます。

そして、ここでは「招かれる」という言葉が使われています。あくまでも婚宴の主演は花嫁です。その周りで喜び楽しむ人々がいます。バプテスマのヨハネは、自分のことを「花婿につき添う友たち(マタイ 9:15)」と言いました。旧約時代の聖徒たち、患難時代に信じた人々、つまり、教会以外の聖徒たちは花嫁の祝いにそのように参加して、共に祝うということです。

そして、「これは神の真実のことばです。」と言っています。そうです、あまりにも良い話なので信じがたいからです。けれども、太鼓判を押しているのです。22 章でも、新しいエルサレムについて、「これらのことばは、信ずべきものであり、真実なのです。」とあります。信じられないから、真実だと太鼓判を教えているのです。ですから、私たちはこれを真実なものと受け入れて良いのです！

10 そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」

使徒ヨハネとしたことが、まことの神以外のものにひれ伏そうとしてしまいました。それだけ、ここでの輝きはすごいということでしょう。これまで、黙示録で、主ご自身ではないかと思われる程の栄光の輝きを反映していました。ですから、その輝きをみてひれ伏そうとしたのです。自分自身の栄光と美に対してうぶぼれて、墮落したのがサタンですね。しかし、それを厳に戒めました。「神を拝みなさい」と言っています。そして興味深いのは、「あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。」と言っていることです。神のしもべにおいて、徹底的に階級のようなものはない、みなが同じところに立っているということが分かります。

それに対して、主ご自身が礼拝を受けておられます。ヨハネ 9 章 38 節で、盲目を癒された人が、イエス様に、ひれ伏しました。そして、トマスが甦られたイエス様を見て、「私の主。私の神。」と言いました(ヨハネ 20:28)。ですから、イエス様は礼拝を受けられても拒むことがなかったのですから、この方こそが神であられ、神の御子であられることを鮮やかに示しています。

それから、次がとても大事な言葉です。「イエスのあかしは預言の霊です」。ヨハネは、この黙示録を、イエス・キリストの黙示という言葉から始めました。神の啓示、預言は全て、イエス・キリスト

を証しするものであるということです。聖書預言を調べている時に、私たちが他のことに逸れていくことは危ういことです。テモテ第一やテトスへの手紙でも、話が逸れていくことについての戒めていくところがあります。イエス様が預言の中心です。主が言われました、「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」そして、甦られてからも話されました。「ルカ 24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」次に、イエス様が栄光と力を身にまとして、天から地上に来られる幻があります。

こうして、私たちはバビロンの不品行とその滅び。そしてキリストの花嫁の婚姻と祝宴の姿を見ました。私たちが、キリストの花嫁として、正しい行ないに注目していく。主への忠誠からぶれない、いろいろなことがあっても、それでも主に対する証し人なのだということを忘れない。必ず報いがあります。